

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤの人々 (世界の街角 15)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5817

マヤの人々

国立民族学博物館助教授 八杉佳穂

■古代マヤから現代マヤへ

マヤといえば、おそらく誰もが古代マヤ文明を思い浮かべるのではなかろうか。マヤ文明の名を知らない人はいないと思うが、しかしその中身となると、ほとんど知られていないようである。我が高校の恩師の社会科の先生でも、マヤとインカを混同するくらいだから、マヤ学などはまだ学問とは認められていないといつてよい。中米を専門とするひとりとして歯がゆいばかりであるが、ヨーロッパについて教える知識と同じくらいのレベルまで引き上げるには、まだまだ時間がかかりそうである。

よく知られているように、新大陸が歴史の仲間入りしたのはコロンブスからで、それゆえ、それ以前は、コロンブス以前とか、歴史以前とされてきた。しかし、マヤやサポテカなどの文明は、文字をもっており、みずからの歴史を書き残していた。解説が進んだおかげで、マヤでは、「パカル王」や「楯ジャガー王」などの名やその即位の年代などがわかるようになってきた。そのため、マヤでは3世紀末には歴史時代にはいっていたといっても過言でない。

しかしそうした高い文明も、16世紀の初め頃までには、アステカを除いて衰退していた。それでも高文明を築いた人々の子孫はたくさんいた。それがスペイン人による征服を契機に、病気や強制労働などで、急速に減少し、その数は、征服後わずか数十年の間に、10分の1に減ったといわれる。世界でもまれにみる悲惨な歴史の一つであるが、それから約500年の間に、少しずつ回復して、中米の先住民の人口は800万以上になった。それでも征服前の人口は1,000万とも2,000万ともいわ

れるので、いかに多くの人々が失われたことか。

■現代マヤ

現在メキシコからパナマまでの間に存在する言語グループはおおよそ90と数えられる。これまでの分類では、そのうち30あまりがマヤ語族に属する。古代マヤ文明時代に話されていた言葉をいまに伝えているのである。しかもその人口は中米全体の半分強で、中米最大の言語グループである。

古代文明が栄えたのは、ユカタン半島からグアテマラの低地であったが、現在も、マヤ人はほぼ同じ地域に何千年も変わりなくいる。とはいえ、その多くは、文明が栄えた低地ではなく、グアテマラからメキシコのチアパス州にかけての高地に住んでいる。

マヤ人はたしかに古代マヤ文明の子孫であるが、その生活は、古代マヤ文明のあとを探るのが困難なほど、素朴といつてよいだろう。彼らの生活は、我々からみると、生活に必要な最小限とはこんなものかと気付かせてくれるほど、物質的にほとんどなにも持たない。

ふつう台所と寝る部屋は別棟である。台所には、土間に3つの石が置かれている。その間に焚き木をくべて、1日中火を絶やすことはない。石の上には、コマルと呼ぶ直径50cmくらいの丸平鍋や大壺をのせる。火の横には湯を沸かす水差のような形の壺を置く。コマルは、トウモロコシを挽いた粉を平たく伸ばしたトルティリヤを焼くためである。主食であるトウモロコシはメタテ（平石臼）とマノ（挽き棒）で挽く。大壺でトウモロコシの団子ともいえるタマルを蒸す。そのほかには、水汲みの壺、スープをつくる土鍋などの素焼きの土器、それに籠ぐらいしかない。いや、日干し煉瓦で作られ、煤で真っ黒くなった薄暗い部屋の中を目を凝らしてみると、低い椅子や食べ物を吊るす網などがあるかもしれない。

食器は、たまに丸ヒョウタンを半分に切った椀や、細長い小さなヒョウタンの匙などを見かけることがあるが、ふつうは、もう、大量生産された

コップやスプーンなどである。鍋も金物の鍋であるし、水汲み用の壺もプラスチック製のものに代わっている。

朝食は、麦茶のような味のする質の悪いコーヒーにパン、または昨日の残りものや卵など、昼食と夕食は、硬い肉切れが少し入った野菜スープ、または肉と豆にトルティリヤといったメニューが一般的である。貧富の差や地域によって若干異なるが、メニューはそれほど変わらない。

しかし、台所は少し異なる。ところによると、メタテとマノは地べたではなく台の上で挽くことがあるし、三つ石の炉ではなく、窯を作っているところもある。プロパンガスを用いる家庭も増えてきた。電気はほぼいき渡ったが、まだ水道は各家庭にはない。そのため水汲みは女性の辛い仕事のひとつである。トウモロコシ挽きも辛い仕事であるが、こちらは、大方の村では、機械を使う粉挽き屋が存在する。朝昼晩と、女性が頭にトウモロコシの粉を入れた器を載せてくる。

台所の横にあるもう一つの部屋には、衣装箱や祭壇などがある。寝るのはムシロの上か、ベッドであるが、家族が固まって寝るので、ベッドは各人ひとつずつはない。暑いところではハンモックが使われる。屋根はシュロ葺や素焼きの瓦であるが、トタン屋根に変え、壁や床もコンクリートにしているところもある。

ラジオやテレビをもつ家庭も増えてきたが、それにしても、我々の家と比べると、何と物が少ないことか。世界を見渡すと、実は異常なのは我々の方であり、これがふつうなのである。

■民族衣装

我々からみると、ほとんど何もない生活を送っているように見えるが、衣装だけは異なる。

女性たちは、村ごとに特徴のある衣装を身に着けている。赤や青や黄色などの派手な色糸を使い、鳥や花や幾何学模様など、さまざまな模様を織り込んだウィピール（貴頭衣）を着て、腰から下はこれまた色とりどりのカスリのスカートや藍色のスカートを巻いている。ウィピールは女性たちが

後帯機で織ったものである。

民族衣装を着けている村の数は、150あまりあったといわれるが、ここ数十年の間に、衣装を捨てる村が増えてきた。現在グアテマラで民族衣装を保持している村は、60あまりしかなくなった。それでも60あまりの村が、それぞれユニークな民族衣装を着ているのである。民族衣装を見るだけで、どこの村の人かすぐわかるわけである。言い換えると、村や町が単位となっており、彼らにとって重要なのは、村や町なのである。

民族衣装は、伝統衣装とよく言われる。しかしその伝統は100年あまりの間にできたものである。確かにマヤ文明時代から、貴頭衣はあった。それらは、現代と変わることない後帯機で織られていた。しかし、現代のように、赤や青など派手な色を使い、さまざまな模様を織り込む伝統は、ほんの100年あまりの間に出現したらしい。おそらく、前世紀中頃ドイツで合成染料が発明され、それがおもにドイツのコーヒー移民によってもたらされてからに違いない。それ以前は、裸か、着いても記録に残すにはあまりに粗末か平凡な白のきれで作った衣装であったようである。きっと赤や青などの色に飢えていたのであろう。人々が鮮やかな合成染料に飛びついたのは、想像に難くない。

歴史のない民族にとって、100年は長い。しかしマヤのように歴史のある民族にとって、100年は、ほんの最近の出来事といってもいい。もっとも歴史は学ばれなくてはならないものであり、歴史を保存し、学ぶ機会を失った彼らにとって、100年は、伝統といってもふさわしい長さかもしれない。

—— 展覧会へのいざない ——

1995年9月14日より11月末まで、国立民族学博物館で、「現代マヤ—色と織に魅せられた人々」という特別展が開かれます。この展覧会では、現代マヤの特徴のひとつである民族衣装に焦点を当て、マヤ人の現代生活の諸側面を展示しようとしたものです。ご来場をお待ちしております。